

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

吉村 健司

【所属】(助成決定時)

総合研究大学院大学 文化科学研究科 比較文化学専攻

【研究題目】

カジキ資源をめぐる商業利用と遊漁のコンフリクト：与那国島におけるカジキの利用実態からみる共存の可能性

【研究の目的】

本研究の目的は、沖縄県与那国島におけるカジキ資源の利用実態を解明することで、商業漁業と遊漁の利用の共存可能性を提示することである。カジキ類は回遊性の高い魚種で、世界各地で利用されている。ところが、その生態や資源量などは詳しくは解明されておらず、一部の地域では資源の減少が指摘されている。カジキ類の利用をめぐるのは、遊漁（スポーツ・フィッシング）の対象としての側面があり、非常に人気が高い。スポーツ・フィッシングは資源保護の観点からキャッチ・アンド・リリース（漁獲後の再放流）が推奨されている。この立場からは商業漁業に対して資源低下を招くとして反発する動きもみられる。また、経済的な観点からも一部の地域では遊漁産業を保護するために、沿岸での商業漁業を規制する動きもある。このように、カジキ類の利用をめぐる、商業漁業と遊漁利用のコンフリクトがみられる。本研究では、このコンフリクトを解決し、両者の共存可能性を提示する。

【研究の内容・方法】

本研究では、以上のようなコンフリクトを解決するために、与那国島のカジキ資源の利用形態を明らかにする。そのために、以下のような調査を実施した。与那国島ではカジキ利用について大きな対立はこれまでに報告されていないことから、本研究の事例として選定した。

1) 先行研究の渉猟

先行研究の渉猟は、おもに漁業のコンフリクトのなかでも「資源利用」と「漁場利用」の2点を中心に行った。資源利用に関する研究では、主にイルカ・クジラとマグロについて研究を中心に整理した。また、漁場利用に関しては特に日本の漁業権について整理した。また、沖縄県内において与那国島漁業に関する資料収集等も実施した。

2) 与那国島における現地調査

与那国島における調査は、2012年12月と2013年1月から3月にかけて実施した。調査では、まず現在の与那国島の漁業の実態を把握するために、漁協においてインタビュー調査を実施した。次に、カジキ漁の本来的機能（食糧供給機能）としての側面を把握するために、漁獲から消費までの過程についても調査を実施した。具体的には漁の方法およびセリでの解体、出荷作業、加工・販売について参与観察を行った。また、島外流通については、聞き取りを行った。そして、最後に漁協において資料収集と漁業者および遊漁者へのインタビューを実施した。与那国島では遊漁を行う場合は、与那国町漁協所属の船を傭船する必要がある、そのための届出を行う必要がある。届出には、氏名、出身都道府県、人数、傭船名、傭船期間、遊漁方法を記入した用紙を提出する必要がある。この制度は平成20年度から開始されており、当時の利用票をまとめ、統計分析を行い、遊漁者の傾向を把握した。また、遊漁を積極的に受け入れている漁業者数名に対し

て、商業漁業と遊漁の差異についての聞き取りを行った。

以上の調査を通じて、与那国島におけるカジキ類の商業漁業の側面と遊漁の側面についての実態把握に努めた。

【結論・考察】

与那国島におけるカジキ漁では商業漁業と遊漁が共存している。それは漁協、漁民、遊漁者の3者が、それぞれが利益を享受できる仕組み作りが構築されているからだと考えられる。漁協は遊漁者が傭船時に必要な傭船手数料と入漁料を徴収することで、漁協にとって大きな利益が生まれている。漁民（船主）には遊漁者から漁協には支払われる傭船料とは別に個別の傭船料が支払われる。また遊漁者は遊漁時の漁獲物は遊漁者が持ち帰ることもできるが、放棄することもある。放棄された漁獲物は船主のものとなり、市場へ出荷されるため、遊漁の副収入となる。またそれは、船主の年間の漁獲数に計上される。与那国島では11月に行われる金毘羅祭で年間の漁獲数に応じた表彰が行われ、それは漁民にとって名誉となる。すなわち、遊漁は漁民の名誉獲得に寄与する側面も存在する。遊漁者は与那国島とカジキ漁場との近傍性と高い漁獲可能性を求めてやってくる。

与那国島において遊漁は漁民の日常的な漁業活動に組み込まれており、カジキ利用をめぐるステークホルダーにコンフリクト自体が存在していない。この仕組み作りがカジキ利用をめぐる商業漁業と遊漁の共存可能性を目指すうえで、非常に重要な視点であると考えられる。